

# 新潟県糸魚川市六反田南遺跡出土のヒスイ製大珠未成品

加 藤 学

## 1 はじめに

六反田南遺跡は、新潟県西部に位置する糸魚川市に所在する。北陸新幹線及び一般国道8号糸魚川東バイパスの建設に伴う発掘調査が行われた結果、縄文時代中期の大規模集落であることが明らかになっており、ヒスイ資料が多数出土したことで広く知られている〔新潟県教育委員会ほか2010・2012・2018〕。

本報告資料は、2024年12月21日・22日にヒスイ原産地遺跡研究会で資料検討を行った際に見出した鯉節形大珠の未成品である。本遺跡におけるヒスイ加工を考えるうえで極めて重要な資料であることから、ここに追加報告することとしたい。

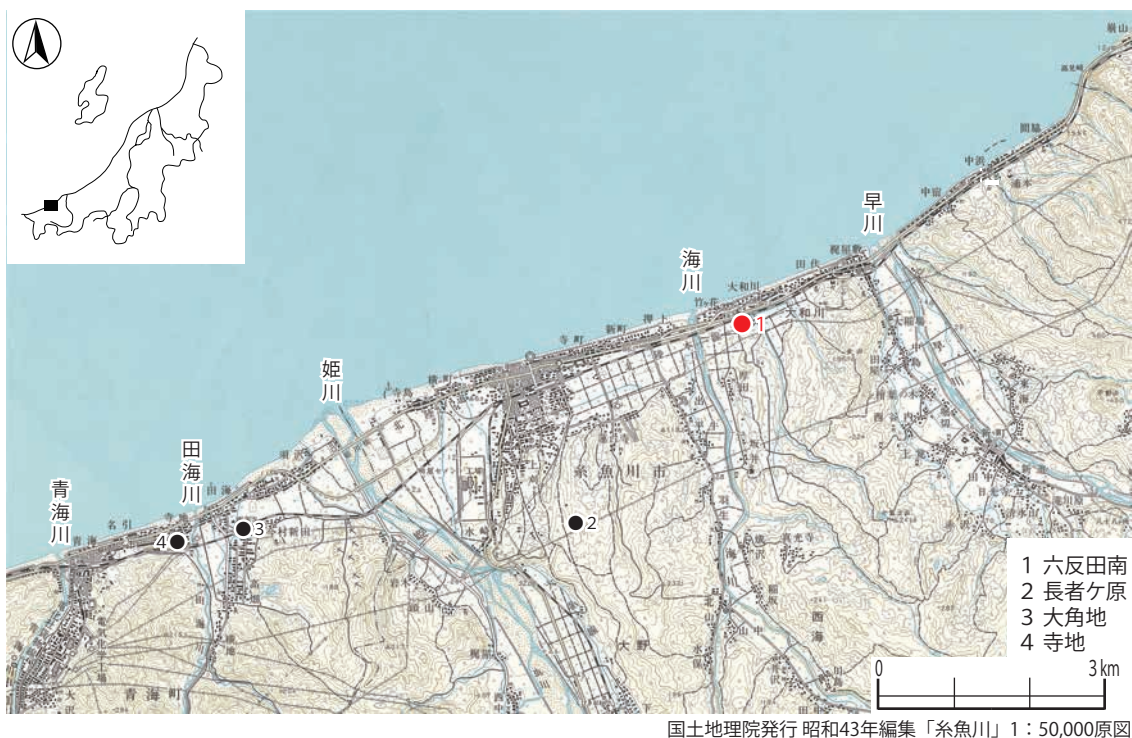
## 2 六反田南遺跡の概要

六反田南遺跡は、糸魚川市大和川字六反田に所在する縄文時代中期を中心とする大集落である（第1・2図）。丘陵と海岸砂丘の間に形成された狭小な沖積地に立地しており、洪水堆積物を挟みながら重層的に遺跡が検出されている。上層は古墳時代・古代・中世、中層は縄文時代中期中葉（古府式段階）、下層は縄文時代中期前葉（新崎式段階）～中葉（天神山式段階）の遺跡で、縄文時代の遺構・遺物は地下2mほどに埋没した状態で発見されている。本資料が出土した下層（第5図）は、中期前葉～中葉の集落で、竪穴建物11棟、土坑90基、土器埋設遺構17基、炭化物集中範囲2か所、集石遺構26基、溝3条、石列1条、廃棄域2か所から構成される。また、廃棄域からは膨大な数量の遺物が出土しており、一括土器として取り上げた土器集中箇所が251か所にも及ぶ。

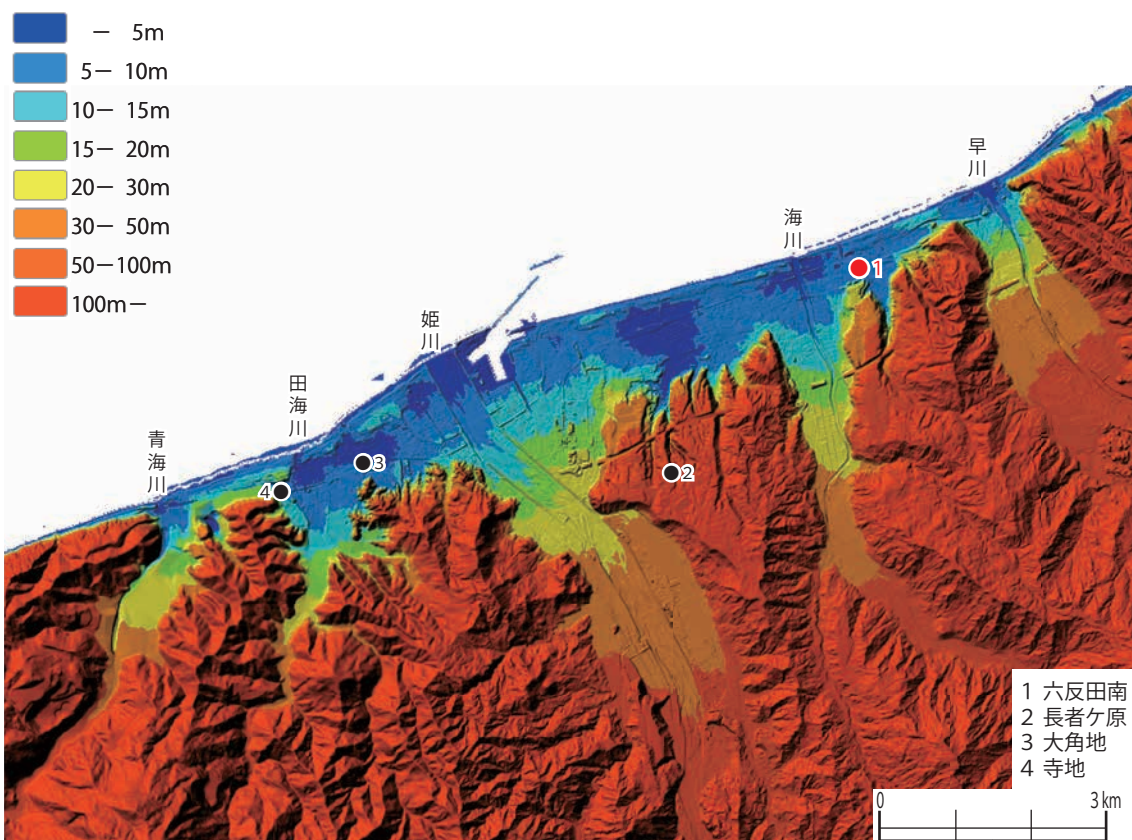
石器も多数出土したが、蛇紋岩・透閃石岩を素材とした磨製石斧の大量生産が特筆される。380点（うち7点が擦切）の磨製石斧と1,310点（うち226点が擦切素材）の未成品のほか、多数の工具（敲石・砥石）も出土しており、他地域への搬出を意図した集約的な生産が行われたとみられる。約200m北側の海岸では、磨製石斧の素材となった蛇紋岩・透閃石岩、敲石に用いられたヒスイや透閃石岩、砥石に用いられた砂岩等を採取することができる。この資源環境が、沖積平野に大集落が築かれた一因と考えられる。

ヒスイが多数出土したことも特筆される。中層・下層のヒスイ資料は641点が報告されており、その内訳を第1表に示した。剥片376点・58.66%、敲石187点・29.18%（多面体敲石を含む）、礫66点・10.3%と多い一方、玉の未成品は7点・1.09%と少なく、成品は出土していない。ヒスイの粗割り・分割が行われたことは確かであるが、目的物が明らかでない状況にある。

本資料が出土した第6次調査下層〔新潟県教育委員会ほか2018〕においても研磨痕のある未成品が6点あるが、いずれも部分的な研磨に留まっており、目的物は明らかでない。また、いずれも長さ5cm以下であり、大珠の未成品になり得るものでない。報告者である高橋保雄は、「ヒスイ製の玉製作の萌芽が見られるものの、本格的な玉生産とはいえないであろう。」とし、「磨製石斧製作に使用されるヒスイ製の敲石の多さから、むしろヒスイの硬さを利用しての敲石の用途に使用されたものと推測される。」と報告している。



第1図 六反田南遺跡の位置(S=1:100,000)



第2図 六反田南遺跡の立地と周辺の遺跡(国土地理院色別標高図に加筆)

報告書名	層位	時期	石錐	磨製石斧末製品	多面体敲石	敲石	玉末製品	礫	石核・粗割素材	剥片	合計
六反田南Ⅱ	V層	中期後葉～後期中葉			1						1
六反田南Ⅱ	Ⅶ層	中期初頭～中葉			5	2				230	237
六反田南Ⅳ	中層	中期前葉～後期初頭			2						2
六反田南Ⅳ	下層	中期前葉～中葉			1	3			2		6
六反田南Ⅵ	中層	中期中葉			33		1	2	1	40	77
六反田南Ⅵ	下層	中期前葉～中葉	1	1	139	1	6	64		106	318
合計（点）			1	1	181	6	7	66	3	376	641
比率（％）			0.16	0.16	28.24	0.94	1.09	10.30	0.47	58.66	100

第1表 六反田南遺跡から出土した縄文時代のヒスイ

### 3 資料報告

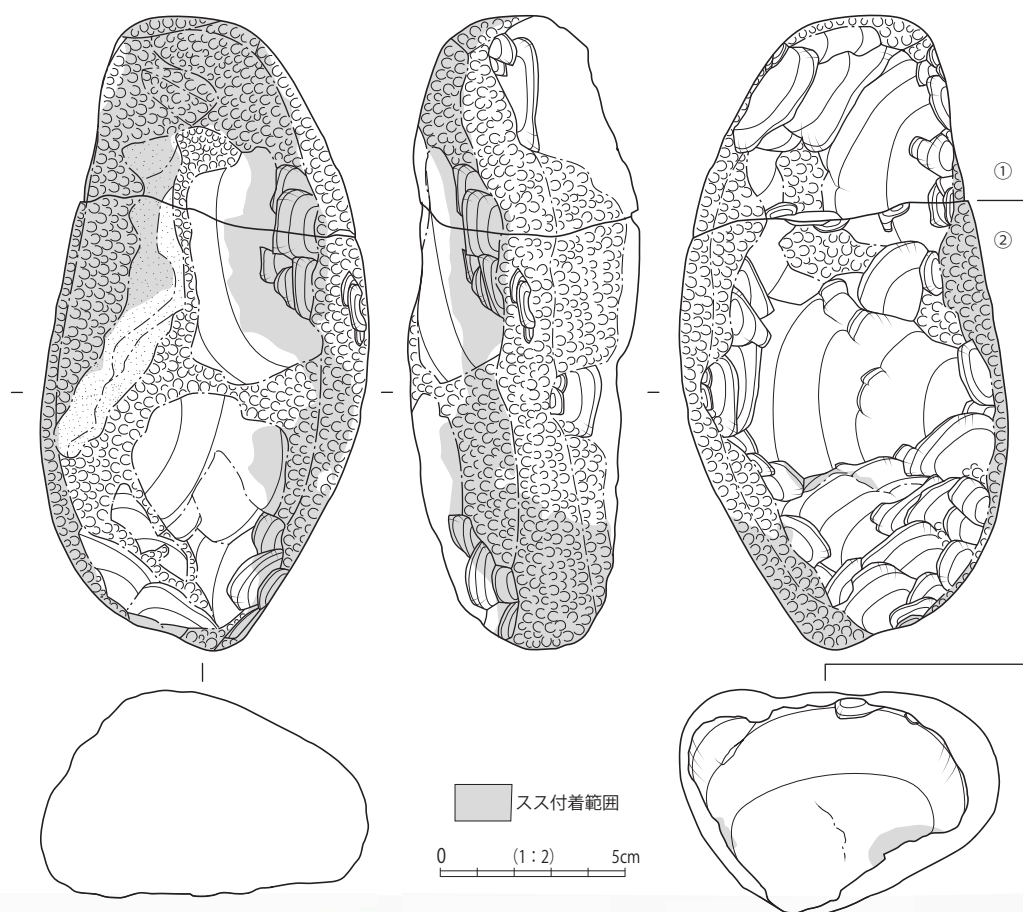
第3図は、鯉節形大珠の未成品（敲打段階の製作工程資料）であり、良質なヒスイを素材とする。下層集落を構成する廃棄域の北東側（32G25・33G11 グリッド）から出土した資料である。折損した2点（実測図上側①：12六反ミ 33G11-4 SM2 フ4、実測図下側②：12六反ミ 32G25 Ⅶa）が接合しているが、7～8mほど離れた地点から出土している（第5図）。出土地点周辺では中期前葉・中葉の土器が出土しており、いずれかの時期に帰属すると考えられるが、鯉節型大珠の未成品と考えれば中葉の遺物である可能性が高い。

本資料は、整理作業時に敲石に分類されていた未報告資料である。本遺跡に特徴的に認められる敲石と比べると、明らかに細長く大型である。外周からの剥離による成形後、広範囲が入念に敲打成形されており、稜線上は凸部を除去するために敲き潰している。成形の過程、敲打の範囲から、敲かれた側と考えたほうが適当と考えられる。棒状を意図して剥離・敲打成形されていることを踏まえ、鯉節形大珠の未成品と判断した。長さ16.8cm、8.5cm、厚さ6cm、重さ1,100gであり、鯉節形大珠の未成品とすれば特大型といえる。鯉節形大珠は、原産地周辺で製作されたと考えられている〔江坂1957等〕が、15cm前後の特大型の未成品は発見されておらず、製作のあり方を考えるうえで重要な資料といえる。

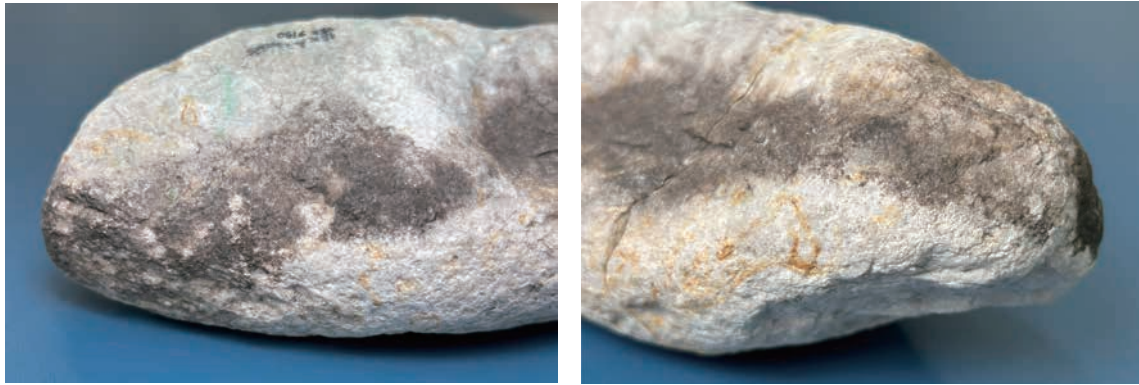
顕著なススの付着も特筆される。敲打痕は、ススの付着前後に認められることから、敲打成形の途中に被熱していることが明らかである。特に、被熱後の入念な敲打痕は、付着したススを除去しているかのようにも見える（第4図）。また、折損面にも、わずかなススの付着が認められる。被熱前の敲打時に潜在的な割れ面が形成され、被熱時に、そこにススが侵入した結果とみられる。被熱後に再び敲打成形した際、潜在的な割れ面から折損し、廃棄されたのであろう。また、ススの付着範囲から想定すると、直接的な被熱は一部分であり、例えば灰の中に潜ったような状態にあったことが想定される。寺村〔1968〕は、ヒスイ加工時の加熱に言及した際、過度な加熱による変質を防ぐため、炉中または焼土にヒスイを入れ「適度の焼き」を行った可能性を指摘している。本資料のスス付着範囲は、まさにそのような方法を想起させる。

敲打成形途中の被熱痕跡は、加工における加熱処理を示す可能性がある。ヒスイの加熱処理〔荒川編2023、荒川・加藤・小池・長田2024、加藤2023・2024〕が行われるタイミングは、分割段階（素材作出段階）と敲打～研磨段階（成形・整形段階）に整理できるが〔加藤2023〕、本資料は後者に分類することができる。表面の劣化を促し、加工を効率化させることを目的とした処理と考えており、被熱後の敲打成形は、その過程を示す可能性がある。





第3図 六反田南遺跡出土のヒスイ製大珠未製品(S=1:2)



第4図 ススの付着範囲を切る敲打痕

#### 4 新資料の意義

第6図に、ヒスイ原産地をかかえる新潟県と富山県から出土した大珠と未成品を示した。本資料のサイズは、最大のヒスイ大珠である朝日貝塚出土資料（2：長さ 15.9cm）など、富山県内から出土した長さ 15cm前後の特大型（2～4）に対応することがわかる。一方、新潟県内においても長さ 12cm前後の大珠（5・6）が認められるが曹長石製・透閃石岩製であり〔長田 2015、小熊 2024〕、ヒスイ製でない。新潟県内における最大のヒスイ大珠は長さ 10.6cmの耳取遺跡出土資料（11）である〔見附市教育委員会 2015〕。これ以外に 10cmを超えるものはなく、また、特大型のような厚みはなく、やや扁平である〔木島 2012〕。

これまでに報告されている原石・素材・未成品において、特大型の素材となり得るものはほとんど認められない。ヒスイ大珠の製作遺跡である長者ヶ原遺跡では 4～10cm〔糸魚川市教育委員会 2016・2022〕、境 A 遺跡では長さ 4～7.5cm前後〔富山県教育委員会 1990〕の成品・未成品が出土しており、主に 10cm以下の大珠の製作が行われたと考えられる。特大型の大珠は、生産地から搬出されたとも考えられるが、それにしても、その製作痕跡は不明瞭である。

このような状況において、長者ヶ原遺跡における長さ 16.6cmの未成品（12）は、特大型の素材となり得る原石が存在したことを示している。分割工程が進んだ資料であることから、原石のサイズが 20cmを超えることは想像に難くない。また、寺地遺跡（第1・2図）における中期の工房址でも 15～20cmほどの分割礫等が出土している〔寺村ほか編 1987〕。六反田南遺跡の未成品を含め、このようなサイズの実石は、海岸漂石でも存在するが、比率としては少なく、河川の礫が利用された可能性も考慮しておきたい。

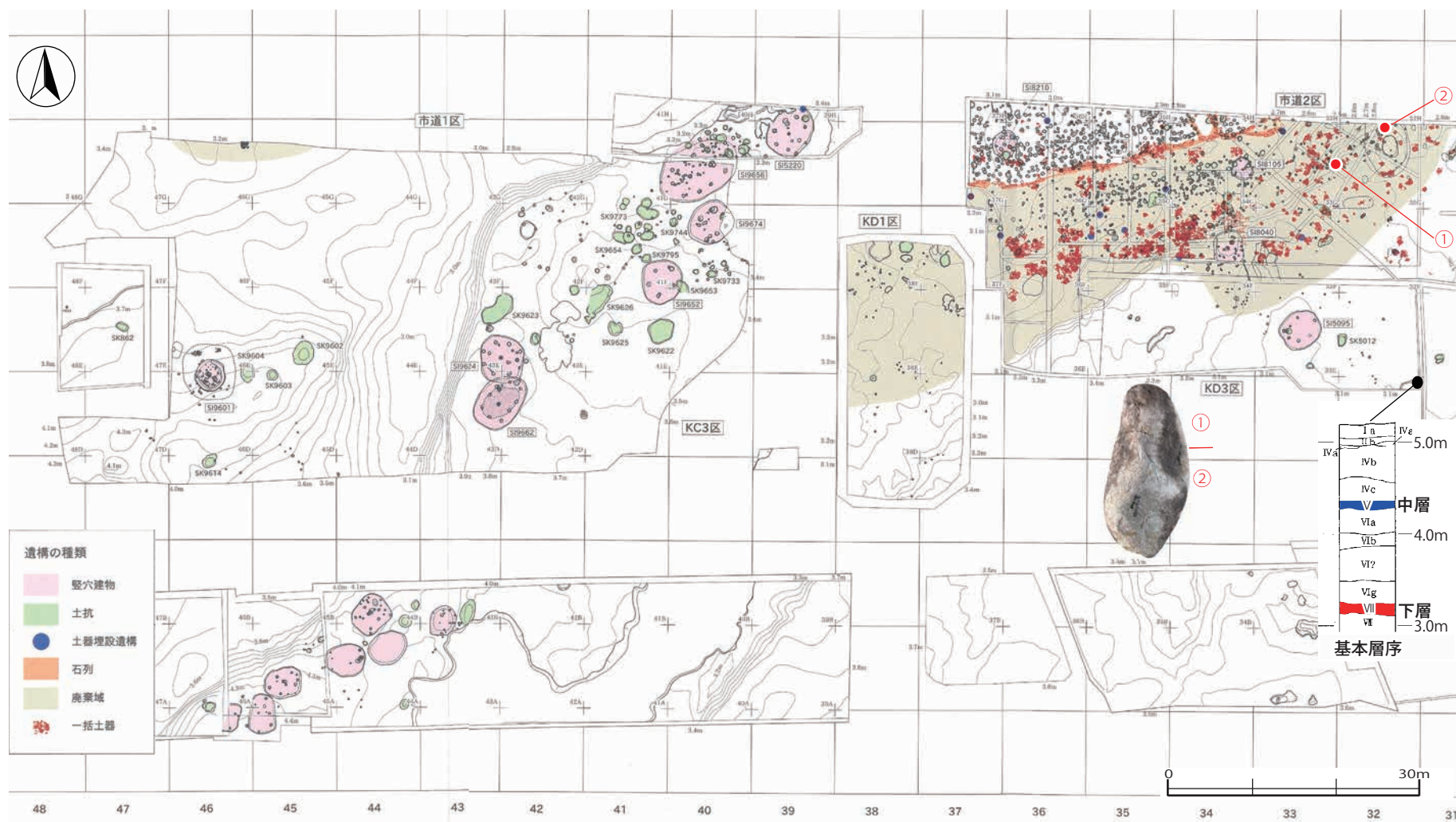
#### 5 おわりに

本稿では、ヒスイ製の鯉節形大珠未成品を報告した。15cmを超える資料であり、これまでに報告されている未成品と比べると明らかに大型である。朝日貝塚出土資料など、最大クラスの大珠（第6図2～4）に対応する未成品と考えられ、その製作工程を検討するうえで重要な資料といえる。

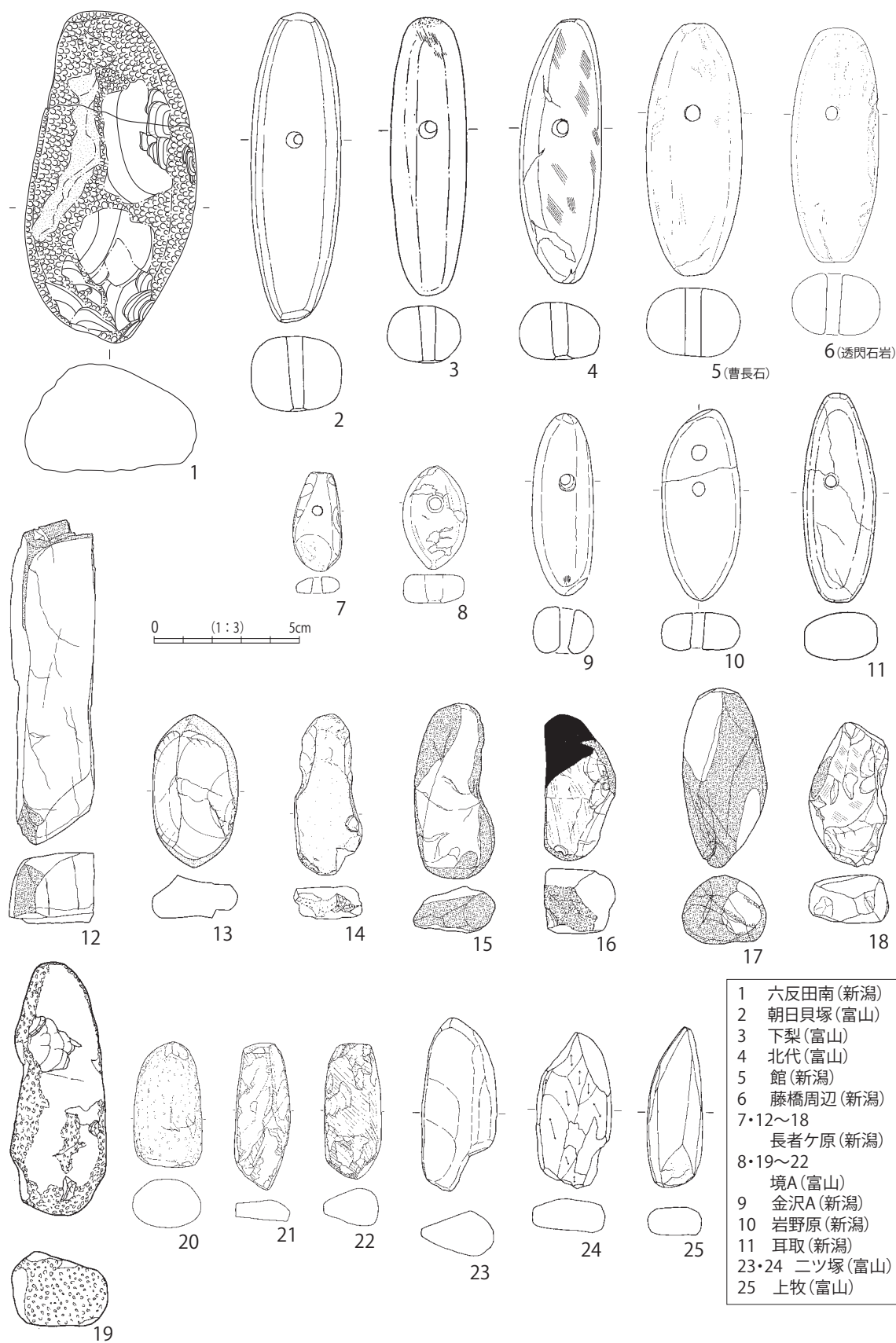
また、本資料は敲石に分類されていた資料から見出したものである。境 A 遺跡出土の第6図 19 は敲石として報告されているが、本資料との類似性を鑑みれば、鯉節形大珠の未成品といえるかもしれない。「敲いた側」「敲かれた側」の判断は極めて難しいが、敲石に分類された資料の中に多様な形態の大珠の未成品が含まれる可能性があり、製作工程と資料の再評価が必要と考える。

加えて製作過程で被熱していることも重要である。被熱前から敲打成形が始まっているが、被熱後にも入念に敲打している（第4図）。この痕跡は、上野〔2007〕が指摘した二次的な被熱とは明らかに異なり、





第5図 六反田南遺跡下層の遺構配置とヒスイ大珠未成品の出土位置



第6図 新潟県・富山県における大珠(2～11)と未成品(1・12～25)

2～4:富山県埋蔵文化財センター1987 5:長田2015 6:小熊2024 7・13・16:糸魚川市教育委員会2022

8・19～22:富山県教育委員会1990 9・10:小熊2001 11:見附市教育委員会2015 12・14・15・17・18:糸魚川市教育委員会2016

製作過程で被熱したことを示している。加工の効率を高めることを目的に加熱した可能性を指摘したが、ヒスイの加熱処理に関する研究は始まったばかりであり、課題も指摘されている [大屋 2024]。ヒスイ原産地遺跡研究会では、資料に残された痕跡学的な検討とともに、付着物の同定など、理科学的な分析を併行して行っている。本資料が、今後の検討材料として活用されることを期待したい。

最後に、本資料の報告に当たり、ヒスイ原産地遺跡研究会のみなさまから貴重な御教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

## 引用文献

- 荒川隆史編 2023 『新潟県考古学会 2023 年度秋季シンポジウム「ヒスイ原産地遺跡から見た縄文～古墳時代のヒスイ 玉製作とその展開」発表要旨』新潟県考古学会
- 荒川隆史・加藤 学・小池悠介・長田友也 2024 「ヒスイ製品の加熱処理」『考古学ジャーナル』804 pp.15-20 ニュー・サイエンス社
- 糸魚川市教育委員会 2016 『史跡長者ヶ原遺跡－第 6 次～第 13 次埋蔵文化財発掘調査報告書－石器・石製品編』糸魚川市埋蔵文化財調査報告
- 糸魚川市教育委員会 2022 『史跡長者ヶ原遺跡－総括報告書－』糸魚川市埋蔵文化財調査報告
- 上野修一 2007 「焼かれた玉－硬玉製大珠の二次的変形－」『日本玉文化学会第 5 回シンポジウム栃木大会「縄文時代の社会と玉」資料集』pp.32-37・v・vi 日本玉文化学会
- 江坂輝弥 1957 「所謂硬玉製大珠について」『銅鐸』第 13 号 pp.1-20 立正大学考古学会
- 大屋道則 2024 「ヒスイの加熱処理は行われていたのか」『シンポジウム 装身具研究の現状と課題 発表要旨集』pp.23-28 明治大学黒耀石研究センター・日本玉文化学会
- 小熊博史 2001 「新たに確認された縄文時代の大珠について－長岡市藤橋遺跡周辺と岩野原遺跡の事例－」『長岡市立科学博物館研究報告』第 36 集 pp.113-132 長岡市立科学博物館
- 小熊博史 2024 「長岡周辺で発見された縄文時代中期の大珠類」『長岡市立科学博物館研究報告』第 36 集 pp.29-42 長岡市立科学博物館
- 長田友也 2015 「南魚沼市館遺跡出土大珠－硬玉製以外の大珠について－」『越佐補遺些』第 15 号 pp.34-37 越佐補遺些の会
- 加藤 学 2023 「縄文時代前期・中期におけるヒスイ玉の製作」『新潟県考古学会 2023 年度秋季シンポジウム「ヒスイ原産地遺跡から見た縄文～古墳時代のヒスイ 玉製作とその展開」発表要旨』pp.29-36・98 新潟県考古学会
- 加藤 学 2024 「縄文時代前期～中期のヒスイ加工と流通」『ヒスイシンポジウム縄文時代～古墳時代のヒスイの加工と流通』pp.5-6 糸魚川市教育委員会・糸魚川市
- 木島 勉 2012 「新潟県における縄文時代前半期の翡翠製品について」『玉文化』第 9 号 pp.51-69 日本玉文化研究会
- 寺村光晴 1968 『翡翠－日本のヒスイとその謎を探る－』養神書院
- 寺村光晴・関 雅之・青木重孝編 1987 『史跡 寺地遺跡 新潟県西頸城郡寺地遺跡発掘調査報告書』青海町
- 富山県教育委員会 1990 『北陸自動車道遺跡調査報告 朝日町編 5 境 A 遺跡 石器編（第 1 分冊本文）』
- 富山県教育委員会 1992 『北陸自動車道遺跡調査報告 朝日町編 7 境 A 遺跡 総括編』
- 富山県埋蔵文化財センター 1987 『ひすい－地中からのメッセージ－』富山県教育委員会
- 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2010 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 211 集 六反田南遺跡Ⅱ』
- 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2012 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 229 集 六反田南遺跡Ⅳ』
- 新潟県教育委員会・公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2018 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 271 集 六反田南遺跡Ⅵ』
- 見附市教育委員会 2015 『耳取遺跡－2011～2014 年度における耳取遺跡確認調査報告－』見附市文化財調査報告第 37